



Title	首都圏に移住した他地域出身大学生の言語意識：出身地域差に着目して
Author(s)	上林, 葵
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2016, 50, p. 99-115
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70051
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

首都圏に移住した他地域出身大学生の言語意識

—出身地域差に着目して—

上 林 葵

キーワード：首都圏／移住／言語意識／若年層／地域差

1. はじめに

近代化に伴う交通機関の発達、我々のライフスタイルを大きく変化させた。旅行や出張などの短期的な移動をはじめとして、進学や就職、職務上の単身赴任などを目的とした長期的な移住が当然に行われる世の中となり、移動距離や手段を問わず大勢の人々が国内外の様々な地域を行き来している。

「移動」や「移住」を1つのテーマとした研究や報告は様々な分野を通してなされており、言語研究の分野もまた例外ではない。移住により、異なる言語（あるいは方言）を話す人々が出会い、ことばもまた接触し、新たな言語体系が生じる。その新体系の実態そのものや、構築のプロセスを追う研究、移住先の言語をどのように自らのものにしていくかに焦点を当てた習得研究など、その研究範囲は多岐に渡る。

こうした「移住」をめぐる研究のうち、本稿では移住者の抱く言語意識の在り方を明らかにすることを目的とする。特に人口の出入りが盛んな首都圏への移住者を対象とし、自身の言語使用に対する認識および場面ごとのことばの使い分け意識の2点を軸に、出身地域ごとの傾向差を示すことを試みる。

2. 先行研究

国内間における移住者を対象とした研究には多くの蓄積があり、これまで様々な地域を対象に研究が行われてきた。本稿で対象とする首都圏に関しては、九州から千葉への移住者を対象とした岡野（1984）、関西から東京への移住者を扱った不二門（1988）、荻野（1995）、武内（1992）などがあるが、人口の出入りの規模¹⁾の割にはさほど研究が及んでいない印象を受ける。荻野（前掲）はその理由について、これまでの研究が方言研究の一部として行われ、結果的に東京以外の地域が選ばれたことや、そうした方言学者にとって方言を話さなくなる首都圏への移住者は興味の対象外であることを挙げている。しかし、首都圏は文字通り「首都」という社会的・経済的・文化的に最も影響力の大きい都市の集まりであり、他地域からの移住者にとっては自身のことばというものに対してより敏感に意識が向きやすい環境であると考えられる。移住による影響を多分に受けるであろう、こうした首都圏移住者を対象とすることは、特に話者の心理的側面を探る言語意識研究においては重要な意味を担うものであると考えられる。

また、これまでの研究は1つの地域から1つの地域への移住のケースを対象としたものが主で、複数の地域から特定の地域への移住者をまとめて扱ったものは多くない。特に話者の言語意識を出身地域別に分析し、傾向差の解明を試みた研究は山村（1990）に見られる程度で、あまり例がない。様々な地域からの移住者が集まりやすく、出身地域ごとの言語意識の特性を明らかにする上で首都圏はフィールドに適しているといえる。

本稿ではこうした首都圏への移住者の言語意識の多様性について、特に話者の出身地域という属性に焦点を当て、それぞれの特性を明らかにすることを試みる。

3. 調査の概要

調査は2015年5月、首都圏にある大学の学生寮に住む女子学生43名に対し、アンケート調査法にて実施した。学生寮は移住先である首都圏の人々だけでなく、様々な地域からの移住者と密に交流できる場である。そのため、自分自身や他者のことばに対する意識を働かせやすい環境であり、言語意識を明らかにするフィールドとして適していると考えられる。この学生寮は全国各地から学生を受け入れており、本稿で扱うインフォーマントの出身地域

も多少の差は見られるが、四国・沖縄を除き全国に万遍なく分布している(表1)。

インフォーマントの移住年数は、長い者から順に5年が1名、3年が8名、2年が11名、そして1年が最も多い23名と偏りが見られる。しかし本稿では若年層全体の言語意識を検討するため、その差は問題としないこととする。

アンケート調査は調査票を学生寮の代表管理者に一括して郵送し、提出された回答をまとめて返送してもらう留置き式を採った。アンケートの内容について、本稿では以下の3項目²⁾を中心に見ていく。

- i) カジュアルな場面における自身のことばをどのような言語変種として捉えているか。(§4)
- ii) 出身地域のことばをどのような言語変種として捉えているか。(§4)
- iii) 場面ごとにどのようにことばを使い分けていると意識しているか。(§5)

表1 出身地域別内訳

地方	都道府県	人数
北海道	北海道	2
	青森	2
東北	秋田	2
	宮城	1
	福島	3
	栃木	3
関東	埼玉	2
	神奈川	2
中部	富山	1
	長野	1
	岐阜	1
	静岡	4
	愛知	1
	大阪	3
近畿	兵庫	7
中国	鳥取	1
	山口	2
	福岡	1
九州	長崎	3
	宮崎	1
計		43

i) と ii) に関して本稿では特に前者の「自身のことばに対する認識」を重点的に扱うが、それをより多角的な視点から捉えるために、後者の「出身地域のことばに対する認識」と併せて検討することとした。詳細については §4 で述べる。なお、両項目に関する質問はともに自由回答とした。iii) は i) の意識を素地に、カジュアル度を一定させたその他複数の場面における使い分けの意識を明らかにする項目である。以上の 3 項目を通じて首都圏移住者の言語意識の内実を導き出すとともに、出身地域ごとに見られる特色についても言及する。

4. 自身のことばに対する認識

移住者は自身のことばをどのようなものとして位置づけているだろうか。先にも述べたように調査では、移住後の現在における親しい者同士のカジュアルな場面での言語使用を、移住者自身がどのような変種として認識しているのかについて尋ねた。その回答をまとめた結果、大別して「方言」、「方言と標準語が混在したことば」、「標準語」の 3 変種の回答が得られた。「方言」については「地域名 + 弁」という回答が多く見られた他、「地域名 + のことば」「地域名 + の方言」といった回答も含まれていた。「混在したことば」については方言名と標準語の両方を挙げている回答や「○○弁交じりの標準語」「標準語よりのことば」といった表現の回答も見られた。以下では、まず §4.1 にてインフォーマント全体の回答の傾向を明らかにし、続いて §4.2 で出身地域ごとの回答の違いや特色について述べていく。

4.1. 全体の傾向

まずはインフォーマント全体の回答の傾向を確認する。次の図 1 は、「自身のことばに対する認識」（以下 [自身のことば]）に前述の 3 種類の回答がどの程度の割合で現れたかを示したグラフである。なお、図には [自身のことば] の他に「出身地のことばに対する認識」（以下 [出身地のことば]）の

回答グラフも併せて示している。これは「自身のことば」が同じ変種名の回答であっても、「出身地のことば」の如何によってその回答に質の違いが生じることを考慮してのことである。例えば東北出身者と関東出身者はともに「自身のことば」を「標準語」とする傾向が見られる。しかし「出身地のことば」については前者がほとんど「方言」としているのに対し、後者は「標準語」とする者の方が多い。このことから、東北出身者の「標準語」は移住によって選択的に使用された変種であり、関東出身者の「標準語」は移住前と同様に引き続き現在も使用している変種であると推測される。同じ「標準語」という変種名であっても、互いに性質の異なるものであることが両グラフを並べることで読み取れる。

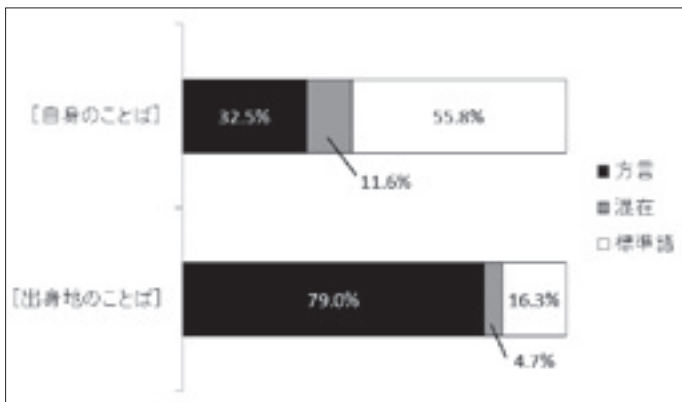


図1 「自身のことば」と「出身地のことば」における回答の分布（全体）

以上を踏まえ図1を見ると、「出身地のことば」については「方言」と認識しているインフォーマントが全体の約8割を占めていることがわかる。これは多くが他地域出身者で構成されている学生寮を調査地としていることから、当然の結果であるといえる。なお「標準語」と認識した者は一部例外を除き、埼玉・神奈川といった首都圏域出身者が主であった。

一方「自身のことば」に関しては、「方言」よりも「標準語」と認識して

いる回答が半数以上であることが明らかとなった。また、その両方が「混在したことば」だとする回答も「出身地のことば」における認識と比べるとわずかながら多くなっている。この「標準語」に対する認識の割合の高さは、やはり一般に標準語使用が行われている首都圏という地域への移住が影響しているものと考えられる。

ではこれらの3変種について、どの地域出身のインフォーマントがどの変種を「自身のことば」として認識しているのだろうか。そこに地域差や傾向は見られるのだろうか。次節では各出身地域の傾向差に着目する。

4.2. 出身地域による傾向差

インフォーマントの出身地域ごとにそれぞれの変種の回答の分布を算出すると、次の図2のようになった。グラフの左側が「出身地のことば」を、右側が「自身のことば」に対する各変種の回答割合を示している。

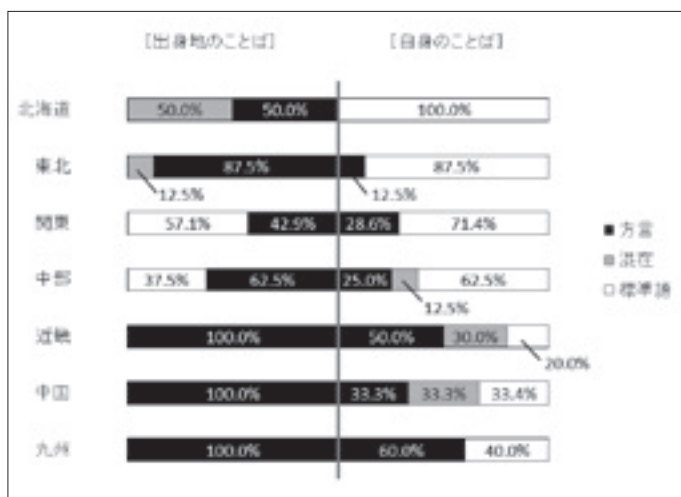


図2 「自身のことば」と「出身地のことば」における回答の分布（地域別）

図2によると、各変種の回答分布は出身地域ごとにかなり異なる傾向を示

していることがわかる。中部以東の東日本出身者の場合、関東出身の一部インフォーマントを除き〔出身地のことば〕を「方言」と認識する回答の割合が優勢である。〔自身のことば〕に目を向けると、反対にいずれも「標準語」の認識がかなりの割合を占めている。先にも述べたが、特に東北出身者の場合は〔出身地のことば〕と〔自身のことば〕の認識の差異が大きく、前者を「方言」とする回答が9割近いのに対し、後者は反対にほとんどが「標準語」との認識を示している。

一方で近畿以西の西日本出身者の場合、いずれの地域も〔出身地のことば〕に関してはすべてのインフォーマントが「方言」と認識している。〔自身のことば〕に関しても、東日本出身者の回答と比べると「方言」の認識がやや高く現れており、特に近畿や九州の出身者の回答にその傾向が強く反映されている。両地域に関して、渋谷（1995）や陣内・坪内（1995）では地元の方言に対する地元住民の「好き」という意識の高さが示されているが、〔自身のことば〕を「方言」とする回答が西日本出身者にやや偏っている点はいくつかの好悪の意識や地域性が関係しているともいえる。

ただ、「方言」の回答の割合が相対的に高くなっているとはいえ、「混在したことば」や「標準語」といった他の回答もなされている点は無視できない。地元意識の強い地域の出身であっても、やはり首都圏という威信の強い地域への移住によって、自身のことばへの意識に影響が現れていることが明らかとなった。

本節では、移住後の現在におけるカジュアルな場面での〔自身のことば〕をどのようなものとして捉えているかを〔出身地のことば〕への認識と併せて示してきた。この〔自身のことば〕への認識をもとに、次節では相手や場所の組み合わせを複数設定した場合など、より具体化した場面でのことばの使い分け意識が出身地域ごとにどのように異なるかについて述べていく。

5. 使い分けの意識

場面は話す場所と話し相手を組み合わせた計6場面を設定し、それぞれの場面においてどのようなことばで話すか、インフォーマント自身の意識を回答してもらった。場所は「東京」と「地元」の2種類、相手は「首都圏出身者（A）」「首都圏・出身地を除く他地域出身者（B）」「地元出身者（C）」の3種類で、いずれもインフォーマントと親しい関係の人物を想定してもらった。

本節ではまず §5.1 で、上記の各場面によってどのようなことばの使用が意識されているか、その全体を確認する。次に §5.2 でインフォーマントの出身地域による使い分け意識の違いに着目し、分析を行う。

5.1. 各場面における使用意識

先に述べた全6場面それぞれにおいて、使用を意識する言語変種の割合をまとめたものが次の図3である。軸のラベルは「場所/相手」を示しており、例えば「東京/A」は「東京における対首都圏出身者との会話場面」を表す。

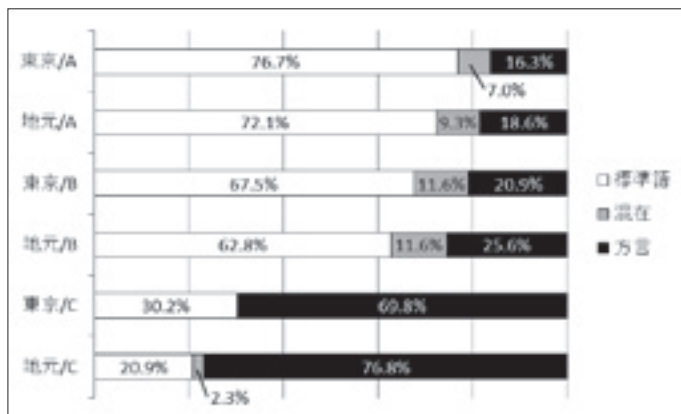


図3 各場面において使用する言語変種の割合

図3によると、対首都圏出身者場面（東京 /A、地元 /A）では「標準語」が最も使用意識の高い変種であり、いずれも7割を超えている。対他地域出身者場面（東京 /B、地元 /B）でも同様に「標準語」の意識が高いが、「混在したことば」や「方言」の使用割合が対首都圏出身者場面と比べて多くなっている点が特徴といえる。対地元出身者場面（東京 /C、地元 /C）は反対に「方言」の使用意識が非常に強く現れている。以上から、相手が地元出身者でない場合は基本的に「標準語」や「混在したことば」を選択する意識が強い傾向にあることがわかる。なお、関東や中部地域出身の一部のインフォーマントの中には「自身のことばに『方言』がなく、すべて『標準語』である」とした者がいたため、対地元出身者場面においては「標準語」の割合も少なからず見られる結果となっている。

話す場所による違いについては、わずかではあるがいずれの場面でも東京より地元の方が「方言」を使用する割合が高く、「標準語」の割合は低くなっている。話すシチュエーションや相手と同じであっても、場所が東京であることで使用することばが変わるという意識があるようである。東京という場所の威信の高さをうかがわせる結果である。ただし、全体の傾向として対地元出身者場面での方言使用意識が際立っている点や「混在したことば」の使用が見られない点から見ても、使い分けの意識は東京や地元などの「場所」というよりは、誰が「相手」であるかによって左右されているようである。この点から、場면을構成する要素に関しては話す「場所」よりも「相手」の属性の方が使い分けの意識に影響しやすいものと考えられる。

5.2. 出身地域による使い分け意識の傾向差

次に、言語意識と属性との関連を明らかにする一環として、どの地域の出身者がどのような使い分けの意識を持っているかについて確認してみたい。§5冒頭で挙げた場面設定に基づき、全インフォーマントの使い分けの意識を出身地域別に示したものが次の表2である。「標準語」の回答が多い順に並べ、各地域の枠の下部にいくにしたがって「方言」の回答が多くなるよう

表2 出身地域別にみた各場面における使い分けの意識

出身地域	ID	場所/相手					
		東京/A	地元/A	東京/B	地元/B	東京/C	地元/C
北海道	北海道 a01	○	○	○	○	○	○
	北海道 a02	○	○	○	○	●	●
東北	秋田 b03	○	○	○	○	○	○
	秋田 b04	○	○	○	○	○	●
	福島 b05	○	○	○	○	○	●
	青森 b06	○	○	○	○	●	●
	青森 b07	○	○	○	○	●	●
	宮城 b08	○	○	○	○	●	●
	福島 b09	○	○	○	○	●	●
	福島 b10	○	○	○	●	●	●
関東	埼玉 c11	○	○	○	○	○	○
	埼玉 c12	○	○	○	○	○	○
	神奈川 c13	○	○	○	○	○	○
	神奈川 c14	○	○	○	○	○	○
	栃木 c15	○	○	○	○	○	●
	栃木 c16	○	○	○	○	●	●
	栃木 c17	○	○	○	○	●	●
中部	長野 d18	○	○	○	○	○	○
	静岡 d19	○	○	○	○	○	○
	静岡 d20	○	○	○	○	○	○
	静岡 d21	○	○	○	○	●	⊙
	静岡 d22	○	○	○	○	●	●
	富山 d23	○	○	○	●	●	●
	岐阜 d24	○	●	●	●	●	●
	愛知 d25	●	●	●	●	●	●
近畿	大阪 e26	○	○	○	○	●	●
	兵庫 e27	○	○	○	○	●	●
	兵庫 e28	○	○	○	○	●	●
	兵庫 e29	○	⊙	⊙	⊙	●	●
	大阪 e30	⊙	⊙	⊙	⊙	●	●
	兵庫 e31	⊙	●	⊙	●	●	●
	大阪 e32	●	●	●	●	●	●
	兵庫 e33	●	●	●	●	●	●
	兵庫 e34	●	●	●	●	●	●
	兵庫 e35	●	●	●	●	●	●
中国	山口 f36	○	○	○	○	○	●
	山口 f37	⊙	⊙	●	●	●	●
	鳥取 f38	●	⊙	●	⊙	●	●
九州	長崎 g39	○	○	○	○	●	●
	宮崎 g40	○	○	○	○	●	●
	福岡 g41	○	○	⊙	⊙	●	●
	長崎 g42	○	○	⊙	⊙	●	●
	長崎 g43	●	●	●	●	●	●

に配置した。表中の○は「標準語」を、◎は「方言と標準語が混在したことば」を、●は「方言」を表す。

表2によると、中部の静岡・富山以东（東日本地域）出身のインフォーマントは場面ごとの切り換えがさほど多くはなく、どの場面でも「標準語」の使用を意識する傾向が見られる。この傾向は特に関東の首都圏（埼玉・神奈川）出身者に目立つが、これは先に述べたように自身のことばや出身地のことばに「方言」が存在しないと考えた結果であろう。長野や静岡出身のインフォーマントが同様の意識を示しているのも、首都圏に比較的近い地域であることが影響しているものと思われる。切り換えが行われている場合は、相手が地元出身者の場合に限り「方言」の使用を意識するという回答が目立つ。この傾向は特に東北や関東の一部地域（栃木）出身者の回答に顕著に現れている。

佐藤（1996）は東北という地域について、日常の言語生活を方言で営むことが自然であり、方言と標準語（共通語）の境界が明瞭な「方言主流社会」であると位置づけている。同じ地域で共に育ったいわば地域社会の一員である地元の友人に対してのみ「方言」を使用し、外部の相手に対しては「標準語」を用いるという明確な使い分け意識は、この「方言主流社会」を反映した言語意識であるといえるだろう。

以上のように東日本出身者の回答には「標準語」の使用を意識するものが目立ったが、反対に中部の岐阜・愛知以西（西日本地域）出身者の回答には「方言」の意識が比較的強く反映されている。対地元出身者場面においてはほぼすべてのインフォーマントが「方言」の使用を意識しており、また、近畿出身者を中心として相手の出身地域如何にかかわらずいずれの場面でも「方言」を使用するとの回答が目立つ。これは東日本出身者の示すものとは正反対の傾向である。

一般に近畿、特に京阪神地域を中心とした関西出身者は、どこでも誰に対してもあまりことばを変えることがないと考えられているふしがある。田原（2006）や井上（2009）はこうした通説について、関西が方言を中心として

言語生活を成り立たせている「方言中心社会」であり、方言と標準語（共通語）というよりは方言と丁寧方言という方言内部での使い分けが重視されていることを要因として挙げている。本稿における近畿出身者の結果に「方言」のみの回答が複数見られた点についても、こうした社会の在り方が反映されたものと捉えることができる。

また、東日本出身者と比べて「混在したことば」の使用を意識する回答が多い点も西日本出身者の特色として挙げられる。相手や移住先のことばである「標準語」の影響を受けつつも自身の出身地の「方言」を織り交ぜていく姿勢は、「標準語」と「方言」の切換えが明確な東日本出身者とは異なる特有の意識の傾向であるといえる。

以上、§5では複数場面におけることばの使い分けの意識について、各変種の場面ごとの使用傾向と出身地域別の回答傾向について分析した。その結果、場面ごとの使用傾向に関しては相手が地元出身者の場合に「方言」の使用意識が高まり、首都圏・他地域出身者に対しては東京場面・地元場面に限らず「標準語」が使用されやすいことが明らかとなった。出身地域別の回答傾向に関しては、特に中部地域を境に東西で大きく差が生じていることが明らかとなった。

6. まとめ

本稿では日本全国から首都圏へと移住した大学の学寮生を一事例とし、各々のことばに対する認識や使い分けの意識といった言語意識の内実を明らかにすることを試みた。その中で、特に移住者の出身地域に焦点を当て、各地域間の意識の傾向差についても考察した。以下にその結果をまとめる。

- a) 話者全体の傾向として〔出身地のことば〕は「方言」とする認識が強いのに対し、〔自身のことば〕は「標準語」や「混在したことば」と認識する傾向にある。
- b) 東日本出身者は〔出身地のことば〕を「方言」とする意識が優勢であ

る一方、[自身のことば]については「標準語」とする傾向が強い。西日本出身者は[出身地のことば]を「方言」とする意識が強く、[自身のことば]に関しても「方言」や「混在したことば」の割合が東日本出身者と比べて相対的に高い。

- c) 使い分けに関して、相手が地元出身者でない場合は基本的に「標準語」や「混在したことば」が選択されやすい。東京や地元といった「場所」よりも、誰が「相手」であるかが使い分けを左右する。
- d) 東日本出身者は場面ごとの切換えが少なく、どの場面でも「標準語」の使用を意識する傾向にある。切換えが行われる場合は、相手が地元出身者の場合に限り「方言」の使用を意識する。反対に西日本出身者は近畿出身者を中心として全場面で「方言」の使用を意識するなど、方言使用への意識が高い。また、「混在したことば」の使用を意識する回答が頻繁に見られるのも西日本出身者の特徴である。

今回取り上げた43名分のデータは意識調査のデータ量としては非常に数が限られている。そのため、本稿では首都圏移住者の言語意識のごくわずかな一事例を示したに過ぎない。しかし、こうした少数のデータの中においても、東日本対西日本という対立した意識の傾向を浮き彫りにすることができた。今後はデータ量を増やし、より細かい地域単位での傾向差を把握することを課題としたい。

[注]

- 1) 総務省統計局によれば、平成26年度の埼玉・千葉・東京・神奈川における他都道府県からの転入者数はいずれも10万人を超えており、その割合は全体の31.9%を占める。
- 2) アンケート調査票の具体的な質問文については、本論末尾を参照されたい。質問文の(1)は本文中の分析項目ii)に、(2)はi)に、(3)～(8)はiii)に対応している。

[参考文献]

- 井上文字 (2009)「関西における方言と共通語」『言語』38-7, pp.49-57.
- 岡野信子 (1984)「移住のもたらす言語状況—千葉県君津市のばあい—」広島方言研究所編『方言研究年報』27, pp.67-86, 和泉書院.
- 荻野綱男 (1995)「大阪方言話者の移住による言語変容」徳川宗賢・真田信治編『関西方言の社会言語学』pp.178-200, 世界思想社.
- 佐藤和之 (1996)『地域語の生態シリーズ 方言主流社会—共生としての方言と標準語— 東北篇』おうふう.
- 渋谷勝己 (1995)「心情とわきまえ意識の衝突するところ」『言語 別冊』24-12, pp.110-121.
- 陣内正敬・坪内佐智世 (1995)「地元意識と開放性の共存する都市方言」『言語 別冊』24-12, pp.150-165.
- 武内佐千子 (1992)「香川方言話者の言語意識と移住による言語変容」『地域言語』4, pp.33-49, 天理・地域言語研究会.
- 田原広史 (2006)「近畿における方言と共通語の使い分け意識の特徴—方言中心社会の提唱」『日本海総合研究プロジェクト研究報告 4 日本のフィールド言語学—新たな学の創造にむけた富山からの提言』pp.174-188, 桂書房.
- 不二門千里 (1988)「関西出身者の東京移住後の言語意識」『国文鶴見』23, pp.45-58, 鶴見女子大学日本文学会.
- 山村時弘 (1990)「天理における言語意識—全国からの移住者を対象として—」『地域言語』2, pp.13-35, 天理・地域言語研究会.

アンケート調査票の質問文

- (1) あなたの出身地では、なに弁（方言）が使われていますか。標準語だと思う方は、そのようにお書きください。

-
- (2) あなたは普段、自分がなに弁（方言）の話者であると自覚していますか。標準語だと思う方は、そのようにお書きください。

-
- (3) 大学に入ってから仲良くなった**首都圏出身の友達**と、授業の後に食事をすることになりました。そのとき、あなたはどんなことばで話しますか。

① 出身地の方言 ② 標準語 ③ その他 _____

- (4) 大学に入ってから仲良くなった**他の地方出身の友達**と、授業の後に食事をすることになりました。そのとき、あなたはどんなことばで話しますか。

① 出身地の方言 ② 標準語 ③ その他 _____

- (5) 東京に**地元の友達**が遊びに来て、街を案内することになりました。そのとき、あなたはどんなことばで話しますか。

① 出身地の方言 ② 標準語 ③ その他 _____

- (6) 帰省して、**地元の友達**と会うことになりました。そのとき、あなたはどんなことばで話しますか。

① 出身地の方言 ② 標準語 ③ その他 _____

- (7) 大学に入ってから仲良くなった**他の地方出身の友達**が、あなたの**地元**に遊びに来ました。そのとき、あなたはどんなことばで話しますか。

① 出身地の方言 ② 標準語 ③ その他 _____

- (8) 大学に入ってから仲良くなった**首都圏出身の友達**が、あなたの**地元**に遊

びに来ました。そのとき、あなたはどんなことばで話しますか。

① 出身地の方言 ② 標準語 ③ その他 _____

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

Language Consciousness among the College Students
from Other Regions to the Metropolitan Area:
Focusing on the Regional Differences

Aoi KAMBAYASHI

This paper attempts to reveal the language consciousness among the immigrants who have moved to Tokyo metropolitan area from other regions in Japan. The contents of the language consciousness focus on these following points; how people are conscious of their own language use in casual situation and what kind of language varieties they are aware of using in some concrete scenes. It is analyzed especially the difference among the regions where people had lived before they moved, and tried to clear the tendency among their regions.

From the research, following results are revealed;

- a) People have the tendency to be conscious that their native language is “dialect” however, their own language tends to be aware of “common language” or “mixed language”.
- b) People from east regions tend to be conscious of their native language as “dialect”, on the contrary, they have a high tendency to think their own language as “common language”. People from west regions consider both their native and own language “dialect”, and they also tend to be conscious that “mixed language” is their own, which eastern people are not much aware of.
- c) When a native place of the conversational partner is not the same as their own, people tend to choose their language such as “common language” and “mixed language”. When people switch their language, “with whom” they talk is rather important than “where” they talk.
- d) People from east regions do not often have a consciousness to switch their languages and tend to use “common language” in any situations. When they switch, they use “dialect” in only the conversation with a person whose native place is same as theirs. On the other hand, people from west regions tend to be conscious of using “dialect” in all scenes and “mixed language” has also a high tendency to choose rather than the east.